

日本古代における国産施釉陶器と舶載陶磁器 一東北地方を考える材料として一

大阪大学大学院人文学研究科 高橋 照彦

1. 日本古代の各種の陶磁器

以下では、日本古代、とりわけ平安時代において国内で生産された施釉陶器と、海外から舶載された陶磁器類について、生産や流通・消費の概要を整理する。

平安時代の国産施釉陶器は、大きくは緑釉陶器と灰釉陶器に分かれる。緑釉陶器は800度前後の比較的低い温度で溶融する鉛釉が施されたもので、一方の灰釉陶器は1,100度を超えるような高温で溶融する植物灰をもとにした釉薬を施す製品である。緑釉陶器は原材料に鉛(丹)などが必要で、ミガキ調整や二度焼きの手間もかかることからも灰釉陶器よりも高級品であり、陰刻の花文や特殊な器種は基本的に緑釉陶器である。

このほか奈良時代には奈良三彩が生産されており、白釉(透明釉)、緑釉、褐釉などの多彩釉を掛け分けている。奈良三彩は平安時代の緑釉陶器と同じ鉛釉であり、釉色だけをみれば、奈良三彩が平安時代頃には緑釉単彩化していくということになる。ただし、器形も生産量も大きく変化しており、奈良三彩は小壺など祭祀的な用途が基本とみられるのに対して、平安時代の施釉陶器は椀や皿などの実用の製品が基本となる。

これら国産陶器の生産に対して、海外からも陶磁器が舶載されている。11世紀後半以降には急増するが、それ以前でも平安時代以降に陶磁器の出土量が増加している。最も一般的なものは青磁と白磁である。

青磁は中国の浙江省、いわゆる越(州)窯系のものが大半で、越州窯系青磁II類とされるやや粗雑な製品は、主に福建省あたりで生産されたものである。

一方の白磁については、I類は河北省や河南省など華北産とみられ、邢(州)窯(・定窯)系ともされるものである。後にXI類などへ変化し、福建省などの華南産の白磁がもたらされるようになる。

このほかにも、黄釉褐彩などで有名な湖南省の長沙窯産の製品も少量ながらもたらされており、一般に上記の越窯系や長沙窯系の青磁類と邢窯系の白磁は、初期貿易陶磁と呼ばれている。これら以外にも、8世紀よ

り華北産の鉛釉の三彩陶器なども搬入されている。

2. 施釉陶器の产地と全般的動向

次に、国内の施釉陶器生産をもう少し詳しく述べる。奈良三彩は、平城京や北郊の奈良山などでの生産と考えられるが、平安時代の緑釉陶器は、平安京の近郊、洛北などで始まり、9世紀初めには尾張の猿投や長門にも広がる(図1)。9世紀中頃には洛西や尾北に、9世紀末頃には丹波の篠や三河の二川、美濃の多治見、周防の鎧銭司周辺、10世紀には近江でも生産が開始し、徐々に生産地が拡散し、新興地が隆盛を遂げていく。

これに対して灰釉陶器は猿投窯で生産が開始され、後に東海の諸窯へと同心円的に広がっていき(図2)、10世紀以降は東濃が生産の中心地になる。

产地の識別は種々の点を考慮する必要があるが、緑釉陶器の場合、平安京近郊窯のものは初期や末期のものを除いて基本的には削り出し高台を持つ。その他の地域は貼り付け高台である。また、近江の典型的なものは、段を持つような独特の高台であるが、同種のものは二川や末期の篠などでも確認されているので、厳密な肉眼での識別は難しい。一方、東海と防長は同じ貼り付け高台だが、断面でみると器壁の中心部分が黒色や灰色になっているようなものが多い。

灰釉陶器は产地の峻別がかなり困難であるが、東濃はヌメッとした良質の焼き上がりのものが多いなど、产地によって胎土や焼き上がりに傾向がある。

3. 施釉陶磁器の分類と変遷

平安時代の施釉陶器の主な器種は、椀皿類である。椀皿類の主な器形と変遷は図3～6の通りである。それ以外の特殊な器種は、図7に掲げる。

＜平安京近郊窯＞ 前Ⅰ期、8世紀末から9世紀初めには三彩も残るが、黄緑色釉が施された軟質の製品が主で、竈(風炉)、甌、羽釜、(釜)蓋、貼り付け高台の椀Xが焼かれる。ただし、都城周辺や寺院が分布の中心で、あまり流通はしていない。

I期、9世紀前半には椀皿類を中心とする生産に

なり、以前よりも量産化していく。製品は軟陶で、円盤状の削り出し高台の椀・皿A類が主体である。II期の9世紀中頃には、須恵質の硬陶が出現して、蛇の目や輪状の高台も認められるようになる。A類のほかにC類やD類もみられ、二次焼成時も三叉トチンを用いなくなる。III期の9世紀後葉には、蛇の目や輪状の削り出し高台が主体で、E類が増加する。

IV期の10世紀前半になると、椀・皿E類がほとんどで、稜の不明瞭なものも多い。輪花も多く、篠製品では器壁が薄くなる。底部外面に施釉されていないものがほとんどになり、輪状の高台が主体となる。V期の10世紀後半には、高台の削り出しや製品のミガキが粗雑になり、法量が縮小する傾向にある。ただし、末段階頃には、洛北で東濃窯系、篠窯で東海や近江の系譜を引く製品の生産も行われている。

<東海> 前I期が猿投編年のO(折戸)10号窯式にほぼ相当し、いわゆる原始灰釉陶器が焼成されている段階で、緑釉陶器や人工施釉の灰釉陶器の成立以前とみられる。瓶類を中心に肩や口頸部などに降灰釉がかかり、暗赤褐色の色調のものが多い。

I期はK(黒雀)14号窯式に相当する。灰釉陶器は白色の色調になり、内面のみに全面に海鼠状の釉が認められ、三叉トチンによる重ね焼きがなされる。貼り付けの角高台で、口縁部が大きく外反する椀皿A類である。緑釉陶器では、A類の他に貼り付けの蛇の目高台のC類などもわずかにみられる。この時期の緑釉陶器には精緻な陰刻花文が施されているが、類品の分布はきわめて限られる。

II期はK90号窯式でも古段階に相当する。灰釉陶器の椀皿類は直接の重ね焼きになり、底部内面の釉が施されなくなり、逆に体部外面に釉が施されるとともに、高台は断面形が鉤爪(三日月)形になる。椀Aは口縁端部の外反度が弱くなり、体部の内湾度も小さくなる。一方の緑釉陶器は、全面施釉で三叉トチンを用い続けるとともに、高台も輪高台のままである。ただし、やや幅広の輪高台を持つE類などが多く認められ、D類もごくわずかに生産される。III期はK90号窯式でも新段階、美濃の光ヶ丘1号窯式に相当する。灰釉陶器などはII期を継承するが、

高台が外面に稜を持つ典型的な形態が多い。緑釉陶器では、輪高台のE類が主体で、五輪花を持つF類も多くなり、陰刻花文は定型的なものになる。

IV期はO53号窯式、美濃の大原2号窯式に相当する。灰釉陶器は漬け掛けに変化し、椀Aの一方で深碗が登場する。緑釉陶器では、F類も残るが、新しい深碗系統の椀G・Hが主体となる。高台はやや高めの輪高台である。V期はH(東山)72号窯式、美濃の虎渓山1号窯式にほぼ相当する。灰釉陶器は深碗が主体を占めるようになり、三角高台をもつ椀Bも出現する。緑釉陶器には、体部に押圧輪花を施す椀Iも登場し、全般にミガキや施釉が粗くなる。

<近江> I期は東海などのIV期、10世紀前半頃に相当する。この時期はF類が残るとともに、椀Gなどがみられ、東海とほとんど変わりがない。

II期は東海などのV期、10世紀後半に当たる。区分不明瞭ながら椀G・H・Iなどがあり、緑釉専焼化する。高台部下端に段を有する有段高台が一般化し、古い段階は高台が細めであるが、徐々に高台が低く段も明瞭になる。底部外面の施釉も省略傾向にあり、器表面も基本的にミガキを施さない。

III期は東海のVI期、東濃の丸石2号窯式前後、11世紀初め頃に当たる。高台が三角形状をなすようになる。底部外面は施釉せず、焼きの甘いものが多い。

防長製品の変遷は省略するが、東海に準じる。

<輸入陶磁器> 主な器種とその大宰府分類を図8に掲げる。青磁は、9世紀には蛇の目高台の越磁I類が一般的で、北部九州ではやや粗雑なII類も存在する。他に分厚い蛇の目高台の長沙窯の椀などもある。9世紀後葉頃からは、輪高台状のI類が一般的で、10世紀後半には細く高い撥形高台などのIII類へと変化する。白磁はI類が9世紀には一般的だが、10世紀後半頃にはXI類と呼ばれる一群の白磁が新たに流入してくる。

4. 施釉陶磁器の流通と消費

製品の流通・消費をみていく(図9~14・表1)。

奈良三彩や長岡京期前後の緑釉陶器はきわめて分布が限られ、寺院や祭祀遺跡などが多いが、東日本では堅穴建物などからも出土する。

9世紀前半には平安京近郊、洛北産の軟質で円盤状高台の緑釉陶器が少量ながらも全国に分布をみるが、猿投産はきわめて少ない。その一方で、当該期の灰釉陶器は、洛北産緑釉陶器よりは多いよう、全国的に分布をみている。9世紀後半以降の東日本では、緑釉陶器において東海産が多く、平安京近郊産は2割以下になるのが一般的であり、遺跡の性格によつても異なるが、灰釉陶器は緑釉陶器よりも数倍程度とはるかに多量に出土するようになる。

10世紀後半頃になると、緑釉陶器では全国的に近江系製品の流通が増えるが、東日本では東海産緑釉陶器も少なくない。灰釉陶器は、10世紀以降は東濃産が増えるが、東日本でも産地を離れると流通量は減っていく傾向にあり、東海道諸国に顕著である。

中国陶磁器については、北部九州を除けば国産陶器よりもはるかに少ない。北部九州ではⅡ類の存在もあって青磁が多いが、他の地域では青磁と白磁ではそれほど量差がみられない。基本的には碗皿類で、他の器種はきわめて少量である。長沙窯製品の出土は非常に少ないが、水注の出土がやや目立つ。

消費様相では、平安期の国産の施釉陶器や中国陶磁器類は、明らかに国府周辺域での出土が突出する。郡衙での出土は多くはなく、拠点的な集落などでの出土が目立っている。なお参考までに、使用状況のわかる事例として薬師寺例（図15）を示す。

文献（史料1～6）によれば、元日節会などで緑釉陶器（青瓷）を酒杯に用い、歯固の儀式で緑釉陶器の供膳具が供されており、国府内でも同様の儀礼的な使用が想定される。また、嵯峨天皇の離宮である冷然院などでは、猿投産の高級緑釉陶器がまとまって出土しており、詩宴などの饗宴の際に緑釉陶器が用いられていたと想定される。国司館など国府周辺域での有力者の間でも饗宴の道具や室内を飾るような調度品として施釉陶器類が用いられ、地方に赴任する国司を中心に都の文化が伝わるのであろう。

例えば、多賀城第92次調査で五万崎地区から出土した緑釉陶器には、猿投窯初期の陰刻花文を持つ稀少な優品がある。それと同一工人の作とみられる資料は、公卿・親王クラスの邸宅が広がる平安京右

京三条三坊の出土品に確認できるのみで、この種の製品を使用できる人物もきわめて限られるだろう。

先の緑釉陶器は、報告書でも指摘されている通り、本来は政府周辺以外での陸奥国司にかかる儀礼や饗宴での使用品だったにちがいない。それは猿投で生産が始まった弘仁6年（815）以降でも早い時期の製品のため、弘仁6年に陸奥守に任せられた小野岑守を介して搬入された可能性が最も高いだろう。

小野岑守は、吉弥候部等波醜ら俘囚を帰順させたことから、弘仁8年（817）に嵯峨天皇から賞賛の詔勅を受けている。さらに、岑守は大同5年（810）の嵯峨天皇が即位した際に侍読の役を務め、弘仁5年（814）成立の勅撰漢詩集『凌雲集』の編纂にも携わり、陸奥守に任せられる以前にも、嵯峨天皇に近く仕えて、唐風文化を先導する立場にいた。

そうなると、この岑守が平安京の最上級の唐風文化をもたらし、対蝦夷政策として利用する方向性も推進したのではないか。胆沢城や出羽国府などへの唐風器物の搬入につながったことも想像に難くない。

ただし、10世紀頃になると必ずしも国府に限らない地域でも施釉陶器類の出土が目立つ。例えば城柵官衙も置かれず青森県でもわずかながらも施釉陶器類が出土する。貢馬などの見返りとして、施釉陶磁器入手することもありえただろうし、国府以外の広い消費者層の需要も想定しておく必要がある。

古代東北の歴史復元のための一資料として、施釉陶磁器類が、さらに有効活用されることを願う。

主要引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系
大西 遼 2020「地方における白瓷生産拡散の実態と猿投窯」『東海窯業史研究論集』III、東海窯業史研究会
尾野善裕 2008「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』
豊田市教育委員会
高橋照彦 1994「東国の施釉陶器」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器—』古代の土器研究会
高橋照彦 1995「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
高橋照彦 2001「地方官衙出土の平安時代の緑釉陶器」『考古学ジャーナル』475号

- 高橋照彦 2003 「平安京近郊の綠釉陶器生産」『古代の土器研究—平安時代の綠釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会
- 高橋照彦 2015 「都と地方の土器」『官衙・集落と土器 1』国立文化財機構奈良文化財研究所
- 高橋照彦 2018 「東北地方北部出土の綠釉陶器とその歴史的背景」『尾駒の駒・牧の背景を探る』六一書房
- 高橋照彦 2020 「近江における綠釉陶器生産の再検討」『待兼山論叢』第 54 号
- 高橋照彦 2021 a 「尾張・美濃の平安期施釉陶器生産をめぐる 2、3 の問題」『京都府埋蔵文化財論集』第 8 集

- 高橋照彦 2021 b 「平安時代における施釉陶器・須恵器の生産と流通—篠窯を中心に—」『考古学ジャーナル』761 号
- 高橋照彦ほか 2024 『篠窯跡群西山 1 号窯の研究』真陽社
- 高橋照彦・館内魁生・福嶋真貴子 2024 「沖ノ島出土奈良三彩小壺に関する基礎的再検討」『沖ノ島研究』第 10 号
- 奈良国立文化財研究所 1987 『薬師寺発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報 45)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2019 『多賀城跡』(宮城県多賀城跡調査研究所年報 2018)
- 太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡 X V—陶磁器分類編—』

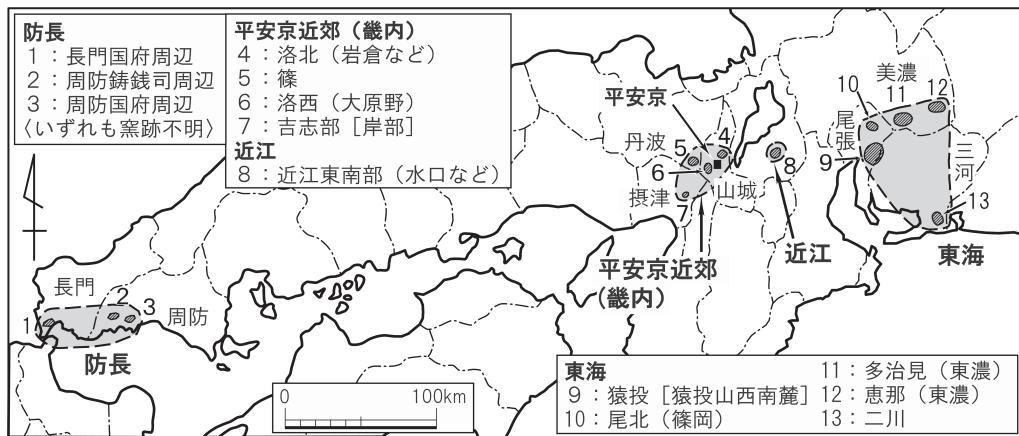


図1 平安時代における綠釉陶器の主な産地

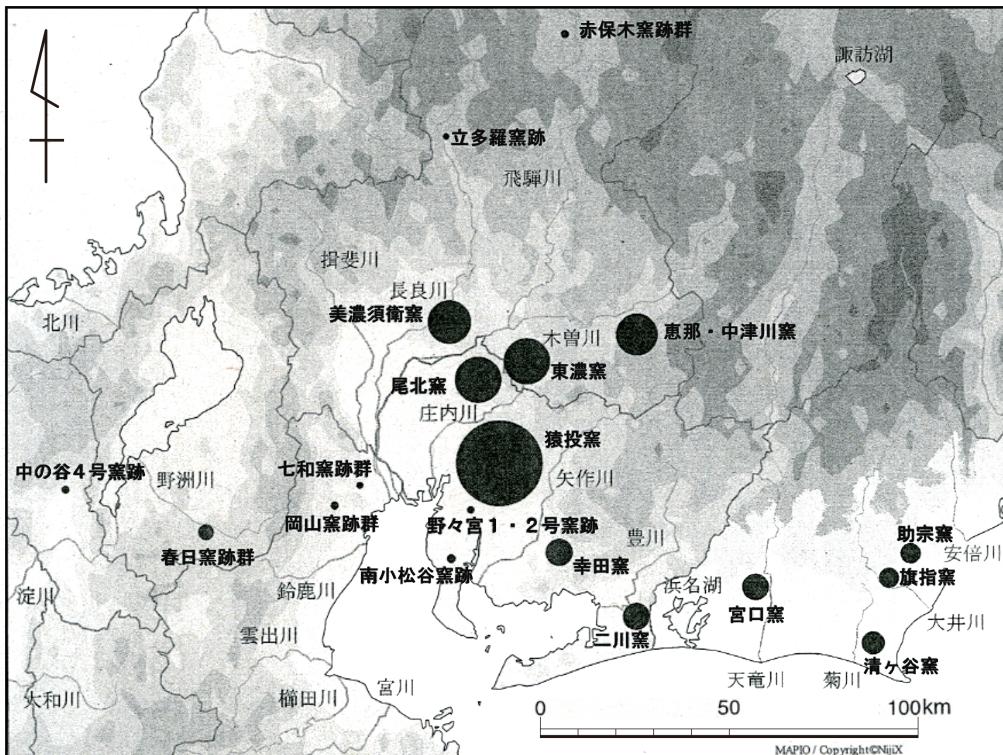


図2 平安時代における灰釉陶器の主な産地 ([大西 2020] を部分改変)

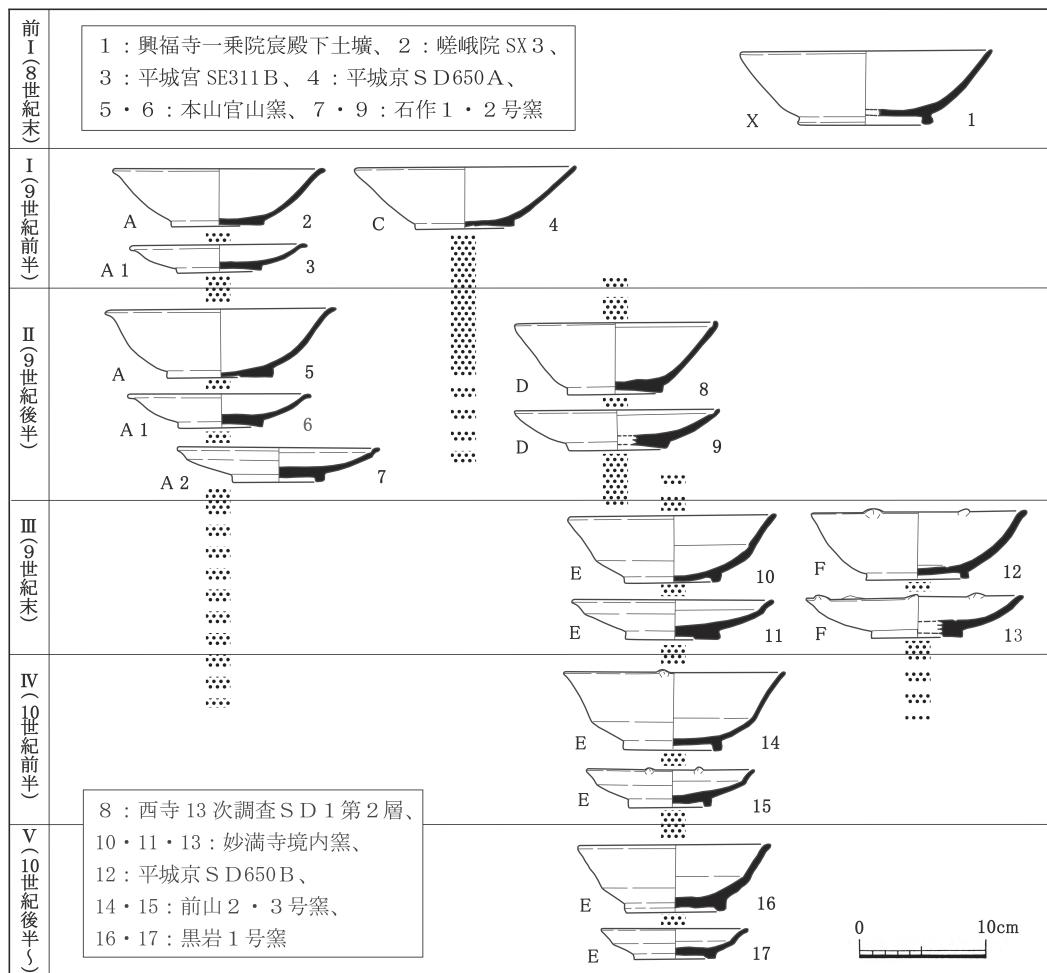


図3 平安京近郊窯における緑釉陶器椀皿類の変遷

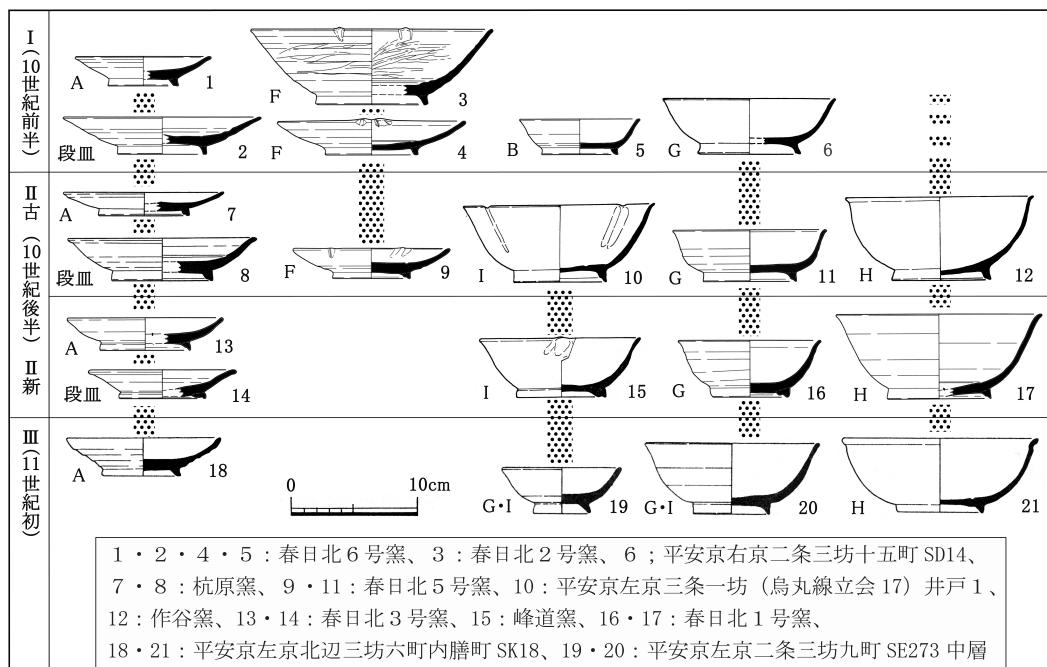


図4 近江における緑釉陶器椀皿類の変遷

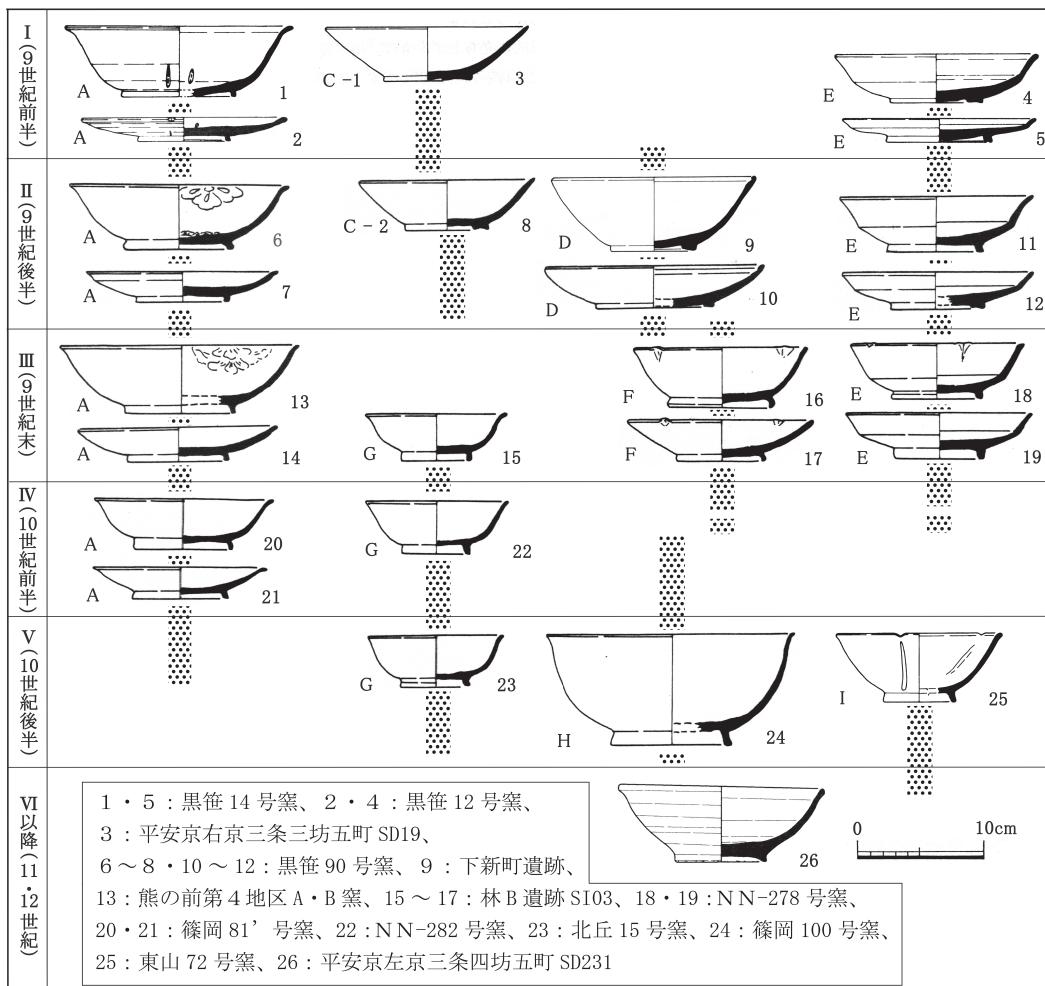


図5 東海地域における緑釉陶器椀皿類の変遷

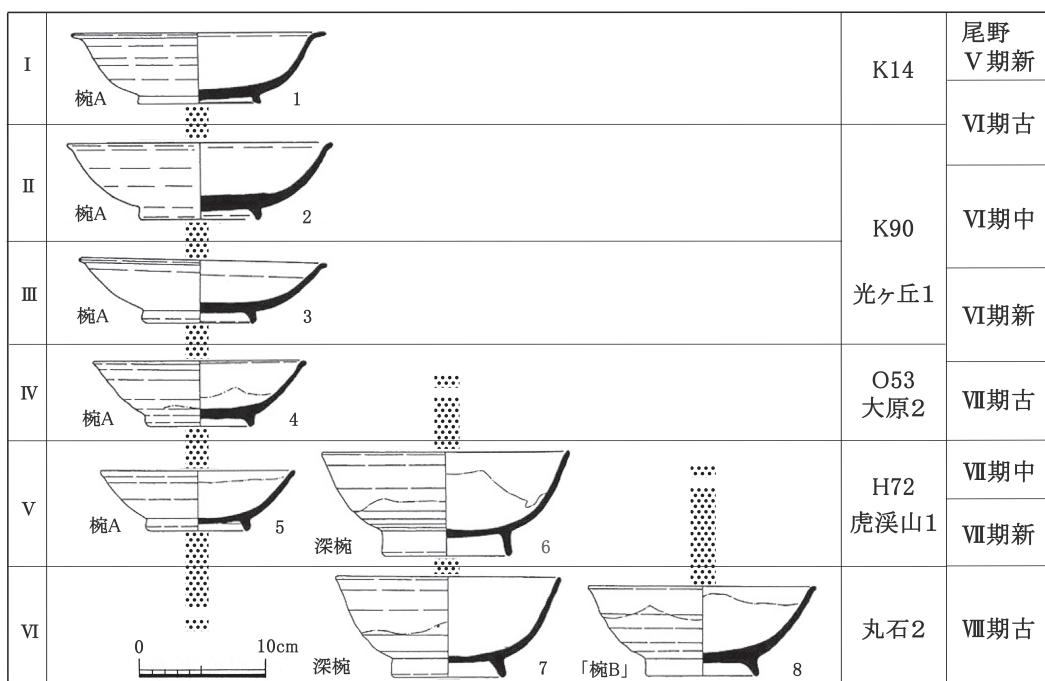
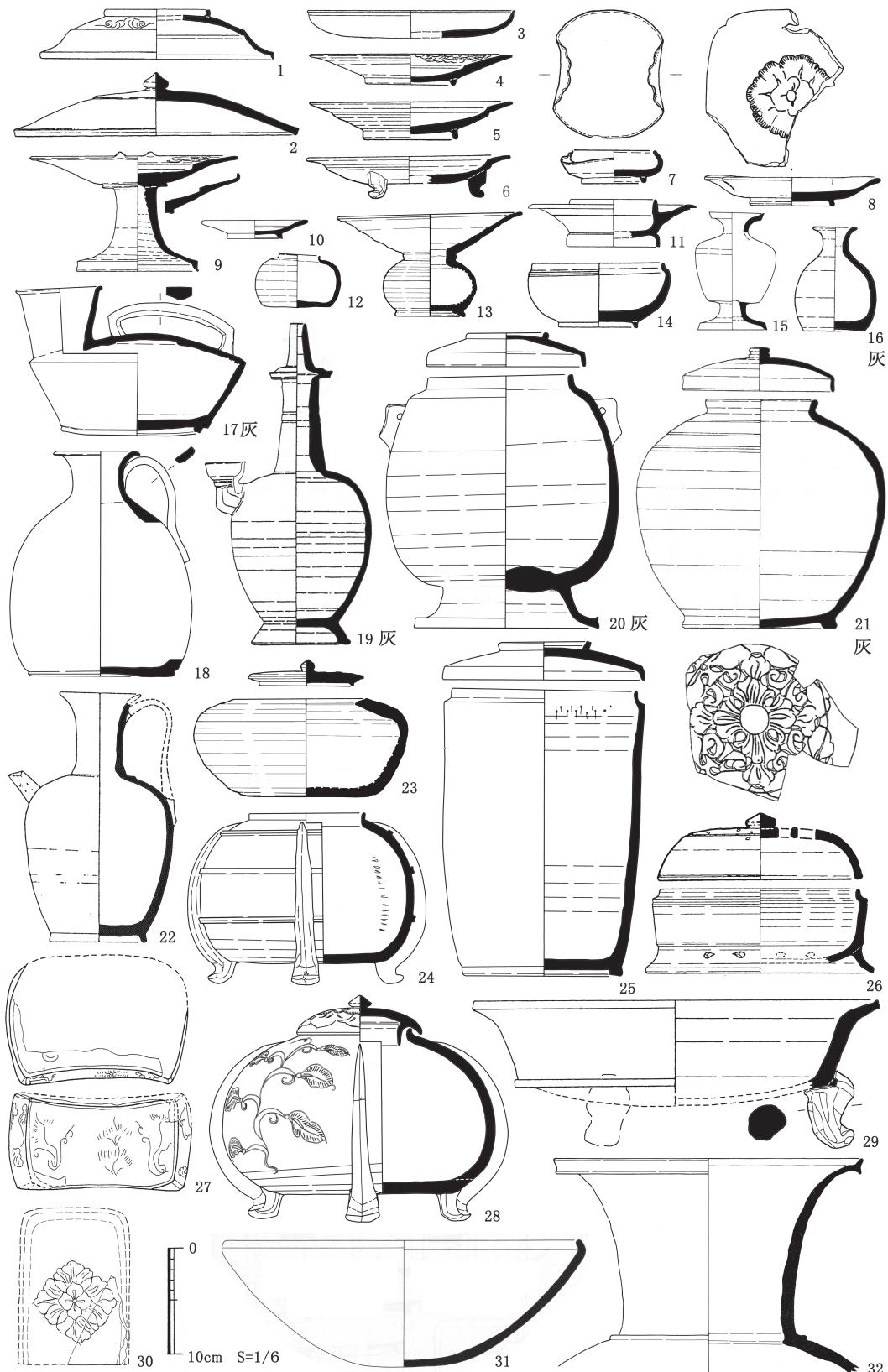
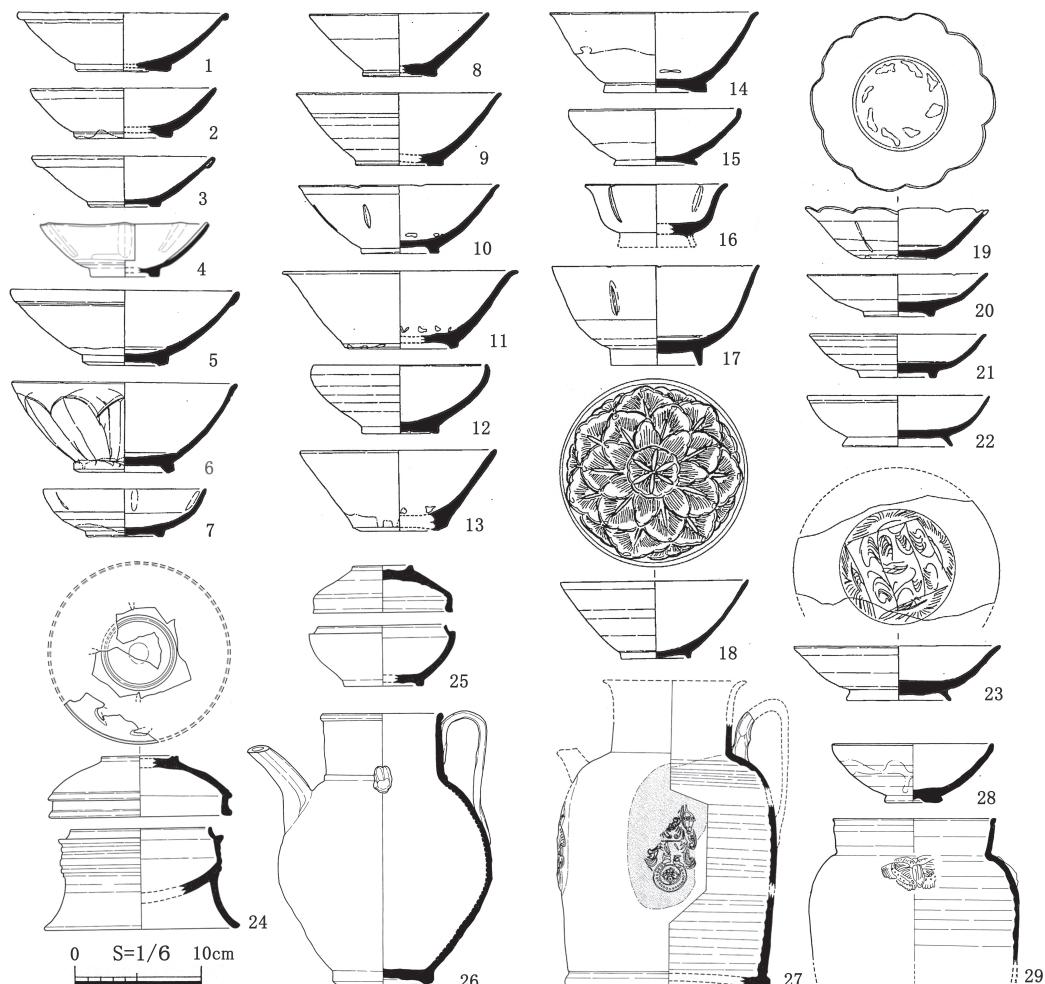


図6 東海地域における灰釉陶器椀類の変遷 ([尾野 2008] を改変して作成)



1・2:蓋、3:皿、4・5:段皿、6:三足盤、7:耳皿、8:角皿、9:高杯、10・11:托、12・21:短頸壺、13:唾壺、14:合子、
15:華瓶、16:小瓶、17:平瓶、18:手付瓶、19:淨瓶、20:双耳壺、22:水注、23:無頸壺、24・28:四足壺、25:筒形
容器('經筒')、26:香炉、27:枕、29:火舍(獸脚は合成)、30:風字硯、31:鉢、32:広口壺 灰は灰釉、他は緑釉

図7 平安前・中期における国産施釉陶器の主な特殊器種



白磁—1:椀 I - 1、2:椀 I - 2a、3:椀 I - 4、4:椀 I - 5?、5:椀 XI - 1、6:椀 XI - 4、7:皿 XI - 3、
越州窯系青磁—8:椀 I - 1a、9:椀 I - 1b(1)、10:椀 I - 2bア、11:椀 I - 2aウ、12:椀 I - 3、13:椀 I - 5、
14:椀 II - 2c、15:椀 II - 2d、16:小椀 I - 2b才A、17:椀 III - 1b、18:椀 III - 2b、19:杯 I - 2A、
20:皿 I - 1b、21:皿 I - 2、22:皿 III - 1a、23:浅形(型)椀×皿 III - 3b、24:香炉、25:合子、26:水注、
長沙窯系黄釉褐彩・青磁—27:水注、28:椀、29:壺

図8 平安前・中期における中国陶磁器の主な器種

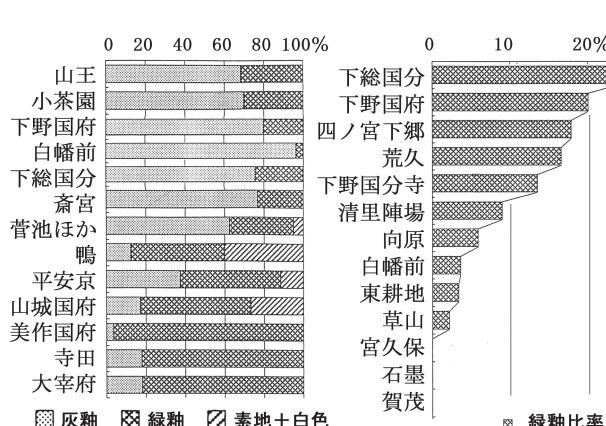


図9 消費地各地における灰釉陶器と緑釉陶器の比率

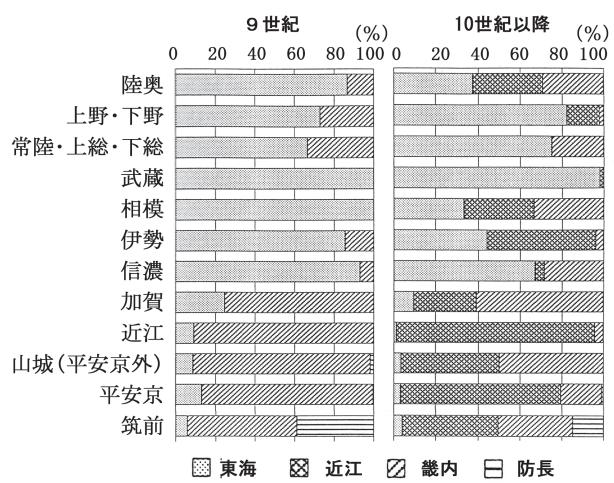


図10 消費地における緑釉陶器の産地構成

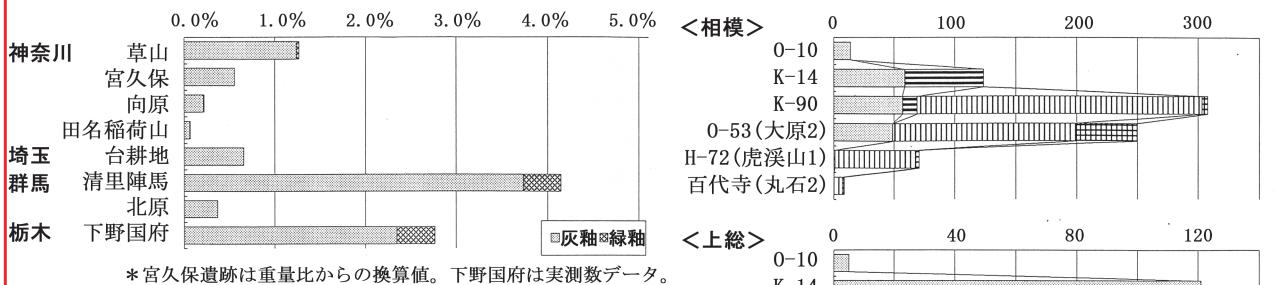


図 11 消費地各地の土器総破片数に占める
灰釉陶器・緑釉陶器の比率

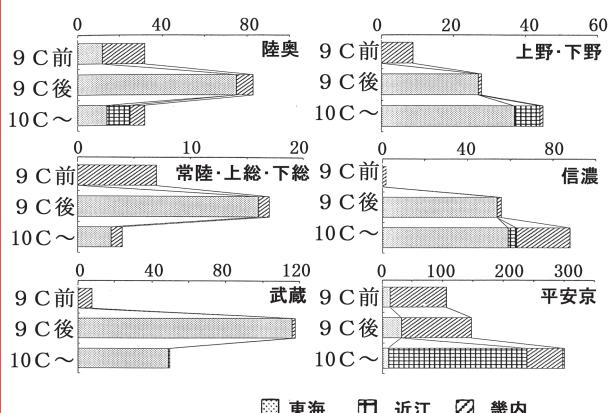


図 12 消費地各地における緑釉陶器の時期別変化

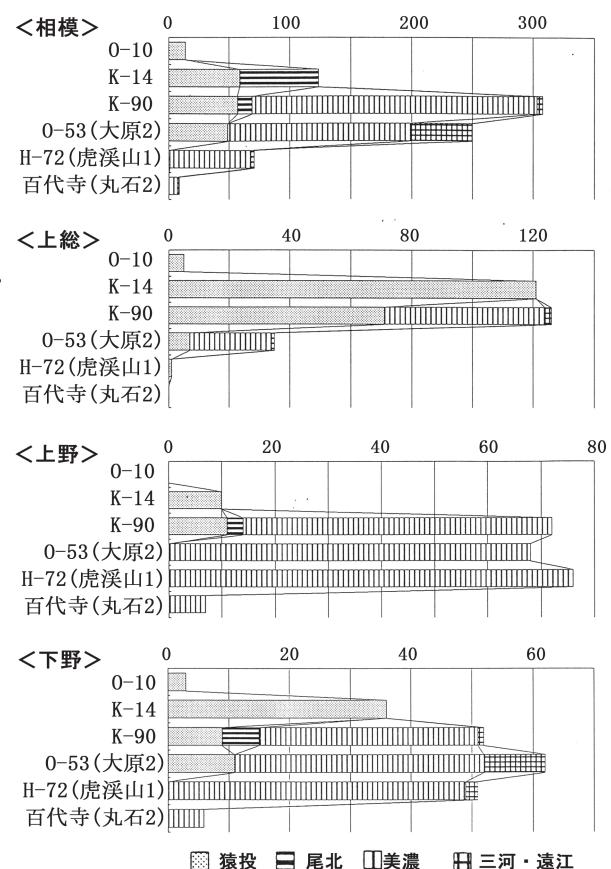


図 13 東国における灰釉陶器の時期別変化

表 1 消費地の性格差と調査面積あたりの緑釉陶器の出土点数

平安京周辺	緑釉陶器の出土点数と調査面積	100m ² あたりの緑釉陶器の出土点数	出雲国府	緑釉陶器の出土点数と調査面積	100m ² あたりの緑釉陶器の出土点数
平安宮内裏(SK25)	96点/45m ²	213.3点/100m ²	ろくしょわき 六所脇(政庁)	20点/360m ²	5.6点/100m ²
藤原良相邸(西三条第)	52点/116m ²	44.8点/100m ²	みやうしじろ 宮の後(曹司)	71点/4,267m ²	1.7点/100m ²
斎宮(伊勢斎王)の邸宅	2,187点/7,556m ²	28.9点/100m ²	おおじょら 大舎原(国司館)	36点/6,008m ²	0.6点/100m ²
左京二条四坊十町	278点/4,000m ²	7.0点/100m ²	ひがんで 日岸田(工房など)	52点/1,490m ²	3.5点/100m ²
長岡京跡右京第349次(平安京外)	44点/2,650m ²	1.7点/100m ²	樋ノ口ほか(外縁区域)	0点/594m ²	0点/100m ²
神野向遺跡周辺	緑釉陶器の出土点数と調査面積	100m ² あたりの緑釉陶器の出土点数	三田谷I遺跡	緑釉陶器の出土点数と調査面積	100m ² あたりの緑釉陶器の出土点数
昭和56年度(正倉院)	0点/1,030m ²	0点/100m ²	94・95年度調査区	3点/4,000m ²	0.075点/100m ²
昭和59年度(郡守城)	1点/1,700m ²	0.059点/100m ²	96・97年度調査区	1点/14,000m ²	0.007点/100m ²
昭和60・61年度(厨家?)	0点/1,550m ²	0点/100m ²	97・98年度調査区	5点/8,950m ²	0.056点/100m ²
平成15年度(周辺南方)	1点/4,734m ²	0.021点/100m ²			
鹿島神宮境内	1点/787m ²	0.13点/100m ²			

